

# 香寺図書通信

第5号 2019.11.1

## なんで「読書の秋」？

「読書の秋」という言葉が広まったのは、戦後 1950～60 年代（昭和 25～35 年）からで、1970 年代（昭和 45 年）以降に全国に知れ渡ることになりました。また、夜の時間が四季の中で一番長くなる秋。そんな秋の夜長を有意義に過ごそうと、古代の中国では、「灯火親しむべし」という言葉が広まりました。「秋は過ごしやすい季節なので、夜には灯りをともして読書をするのに最適だ」という意味です。この「灯火親しむべし」が日本に伝わり「読書するなら秋にかぎる！」「秋の夜長はやっぱり読書！」といった考えが広まりました。

秋は暑い夏と寒い冬の境目。今年も残暑がようやく落ち着き、段々と冬に向かう秋は、誰もが過ごしやすいと感じる季節です。また、人間が最も作業効率が上がりやすい気温というのが 18℃～25℃とも言われています。

「灯火親しむべし」「作業効率に最適な秋の気候」前回の通信に載せた「読書週間」が由来である「読書の秋」。秋の夜長、携帯電話はそっと置いて、好きな本をゆっくり楽しんでみてはいかがでしょうか。

## 図書委員からのおすすめ図書！

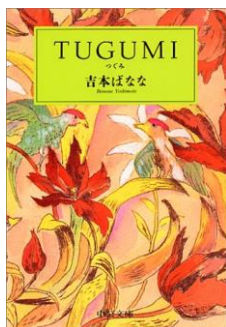


ツナグ

辻村深月

もし死んでしまった人ともう一度会えるなら、あなたは誰に会いたいですか？主人公の歩美は「一生に一度だけ死んでしまった人との再会を叶えてくれる使者」という仕事をしている。使者を通して出会う 5 人と歩美の物語です。これからの生き方について考えさせられる 1 冊です。

2-1 高見遥菜



TUGUMI

吉本 ばなな

病弱で生意気なつぐみと海辺の故郷で過ごした最後の日々。この本は現実味があってすごく物語の構成がわかりやすい本です。二度とかえらない少女たちを描く物語になっています。恭一の優しさも感じる事ができる本なので、ぜひ読んでください。

2-1 西川絢保